「教育臨床総合研究20　2021研究」

地域の実態を生かした小学校外国語教育の実践
― 「World Day in Kakinoki」の取り組みを中心に ―

Practice of Foreign Language Education in Elementary school,
making use of regional characteristics: in the case of World Day in Kakinoki

坂　根　大　雅*　　大　谷　みどり*
Hiromasa SAKANE　　Midori OTANI

要　旨

本論文では、地域の実態を踏まえながら外国のゲストを招いて実施した英語のイベント「World Day in Kakinoki」について取り上げ、準備の過程で大切にしたポイントも詳細に記しながら、成果と課題について検証する。準備段階についても取り上げた理由は、外国語教育において外国の人と交流するニーズが高まっている現在、ゲストとの交流の具体や地域素材を活用した言語活動に向けての過程を詳述することで、企画・運営の方法が蓄積され、イベントの継続や他校との連携等の広がりに繋がる可能性があると考えたからである。本イベントを通して、地域素材を活用し他教科と関連付けながらゲストに発表する内容を工夫することで、児童の相手意識や目的意識が明確になり、英語を使って思いを伝え合おうとする意欲の高まりに繋がった。

〔キーワード〕　小学校外国語教育，地域の実態，地域素材，言語活動，へき地

Ⅰ　はじめに

2020年度、小学校では新学習指導要領が全面実施となり、中学年に「外国語活動」、高学年に教科となる「外国語科」が導入され、大きな変革期を迎えた。新学習指導要領における外国語活動及び外国語科の目標には、「言語活動を通して」コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力の育成を目指すことが明記され（文部科学省2017）、言語活動が土台であることが示されている。また外国語活動や外国語科において言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」（文部科学省 2017）を意味しており、授業づくりの大きなポイントとなる。本論文で取り上げる「World Day in Kakinoki」の取り組みは、英語を使って自分自身のことや地域のことを相手に伝えるという点で、言語活動として位置づけられる。

*吉賀町立柿木小学校
**島根大学教職大学院

勤務校のある島根県鹿足郡吉賀町は、島根県の西端にあり、山口県、広島県とも隣接する人口約６千名の小さな町である。地域には、日本一の清流に選ばれた高津川やそこでとれる鮎、大井谷棚田などの豊かな自然、学校に協力的な人材、古くからの歴史等、地域素材にあふれている（巻末資料１）。柿木小学校は、児童数57名（令和２年度）であり、地域の方の愛情、支援を受けながら大切にされてきた学校である。教育目標は、「ともにのびよう。かしこく・つよく・たくましく」であり、児童も職員も共に切磋琢磨し、伸びていくことを目指している。柿木小学校の児童は、明るく素直である。学年を越えて仲良く遊ぶ姿や、授業中に一生懸命に学習に向かう姿が見られる。人間関係についても、幼い頃から少人数で関り、お互いのことをよく分かっているがゆえ、安心して行動できている。その反面、言葉でのコミュニケーションが十分でなくても、お互いの言いたいことが分かるような姿や、初めての集団の中では臆してしまい、十分に言いたいことが言えていない姿も見られ、本校の課題の一つと言える。

Ⅱ　実践研究の目的

本論文で取り上げる「World Day in Kakinoki」は、筆者が島根大学教職大学院で取り組んだ実践研究「地域の実態を生かした小学校外国語教育の実践」の一部に位置付けられる。そこでまず研究の全体構想について示し、「World Day in Kakinoki」との関連について述べる。

１．研究の全体構想について

へき地である地域の実態を生かしながら、言語活動に地域素材を活用し、児童が相手意識や目的意識を持ちながら、英語を使って生き生きと自分の思いを伝え合うことにつながる方法を検討し、実践・検証を行うことを研究の目的としている（図１）。この研究において、大切にしたポイントは以下の３点である。

①　地域素材を活用した教材作成と授業実践

地域教材を活用しての授業実践、効果の検証を行う。具体的に教材とは、授業で実際に使う絵カード、スモールトークで使用する画像等のデータ、ワークシート、振り返りシートなどを指す。

②　児童の実態を踏まえた個別の支援

少人数学級であることを生かし、個の実態に合わせた効果的な支援の在り方を検討する。

③　小中高及び教育委員会との連携

吉賀町内や近隣の小中高の教員や教育委員会と連携しながら、プランシートやカリキュラムの作成や共有、新教科書を使用した指導の工夫、校内研修や自治体での研修会の実施、地域の実態を生かしたイベントの企画等を行っていく。

本論文で取り上げる「World Day in Kakinoki」の取り組みは、①と③に大きく関わっている。研究では吉賀町で推進されているサクラマスプロジェクトが基底となっており、本イベントもその一環として位置付けられる。従って、ここでサクラマスプロジェクトの概要について述べる。

吉賀町では、「ふるさとでの学びや体験をもとに、いつの日かふるさと吉賀町を支える人材（財）の育成」を基本理念とし、地域と学校が一体となり、保育所から小学校、中学校、高等学校までの子どもたちを育てていこうという熱のこもった事業が展開されている。サクラマス

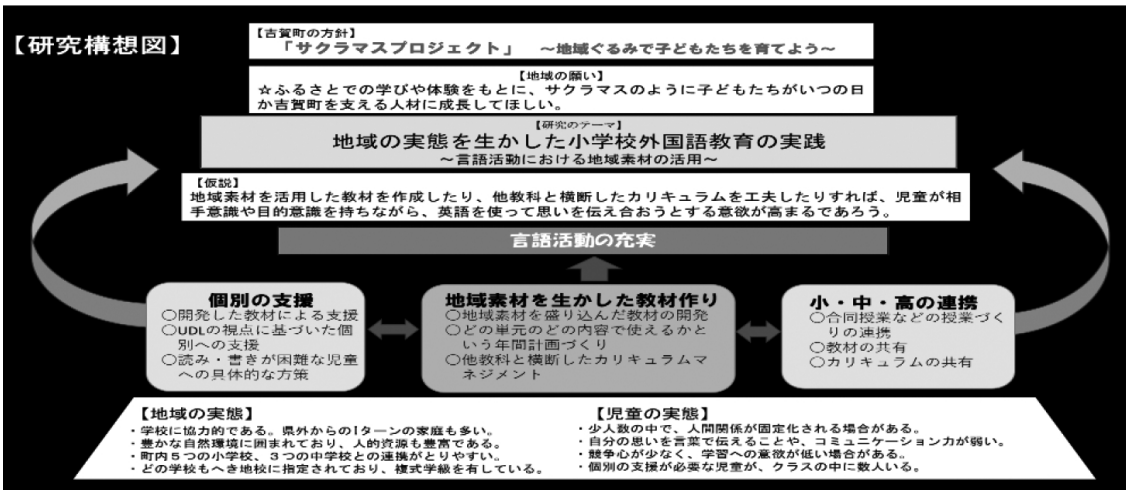


図１　研究の全体構想図

は、マス科の淡水魚である。吉賀町の川で孵化し、海で育ち、いずれ海から遡上し吉賀町の川へ戻ってくる習性がある。それを吉賀町の子どもたち一人一人に例え、将来町を支える人材となってほしいとの願いが込められている町独自の事業である。令和２年度からは、第２期としてSDGsの視点も加えた活動に取り組み、次世代を担うために必要な創造性・協調性など「非認知能力」の向上を目指している。児童・生徒に身に付けさせたい非認知能力には、14の力が具体的に上がっている。

【吉賀町で育てたい「非認知能力」14の力】忍耐力、当事者意識、挑戦する力、表現力、メタ認知、向上心、計画力、想像力、協働する力、思考力、失敗から学ぶ力、内省力、行動力、広い視野

この14の力の内、本校児童の実態を踏まえると、「挑戦する力」や「表現力」を身に付ける必要があるのではないかと勤務校職員で共通理解している。

２．地域素材活用の目的と意義

外国語教育に地域素材を活用する意義について、まずは外国語学習の動機付けの観点から述べる。八島（2019）によると、「伝える内容をもつこと、それを伝えたいという意思をもつこと（Willingness to communicate，以下WTC)、伝える手段をもつこと（言語技術）のすべてを包括的に扱おうとすることに、意義があることになります。そしてその中でL2WTC（L2：第二言語）を養い学習動機づけを高めていくことが学習の心理からは大事となります。」(p.186）とあり、伝える内容が明確であるという点が地域素材の活用と大きく関連する。

さらに、外国語の動機付けでよく使用されるピラミッド型L2WTCモデル（MacIntyre, Clement, Dornyei, & Noels）を基に論じる（図２）。最上層の「第二言語（L2）使用」、第２層の「第二言語（L2）を用いて自発的にコミュニケーションをしようとする意思（Willingness to Communicate)」に向かうためには、第３層の「特定の相手とコミュニケーションをする意思」が重要であり、例えば外部ゲストやALTに伝えるというような相手意識に繋がるものである。また、児童にとって身近な地域素材を活用することで、自信をもって発信することに

繋がると考えれば、第４層の「自信」も地域素材の活用と大きく関連する内容であると言える。

また、丹藤（2019）によると、「英語教育における地域教材のメリットは、トピックや題材が生徒に身近なものであり、それに関する経験や背景知識が豊富であることから、より意欲的、主体的に英語活動に取り組むようになることだと考えます。」（p.６）とある。また贄田（2019）は、「教材に対する自己関連性が高いことは、児童の学習意欲につながるものと考えられます。地域教材の強みはまさにそこにあると言えます。」「教材と児童生徒の距離を縮め、知ってる、もっと知りたいと思わせる力があります。」（p.17）と述べており、地域教材活用の大きな意義について示している。

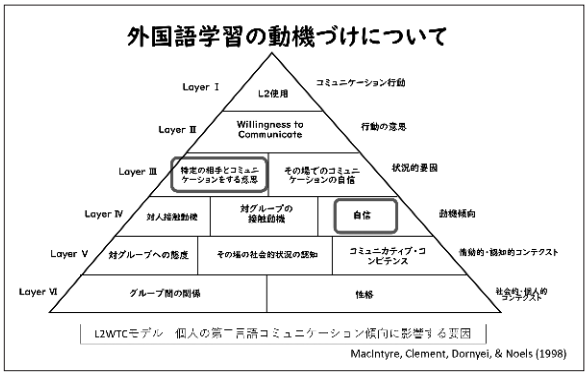


図２　ピラミッド型L２WTCモデル

本研究において地域素材の活用を柱とするのは、地域素材の活用を通して、①児童自身が地域のことを知り、さらに好きになること、②知らなかった地域の秘密を他教科と関連付けながら学べること、③地域外のゲストやALTなどに地域の良さや自慢を発信することにつながること、の３点が理由として挙げられる。

３．児童の実態について

本イベントで地域素材を活用した理由として、地域肯定感が非常に高い児童の実態がある。ここで、本校の児童の実態について、意識調査の結果をもとに述べる。勤務校の３～６年生44名を対象にして、令和２年５月に外国語の授業に関する意識調査を行った中で、「住んでいる地域が好きか」という質問に対して、100%の児童が肯定的な回答をしている（図３）。

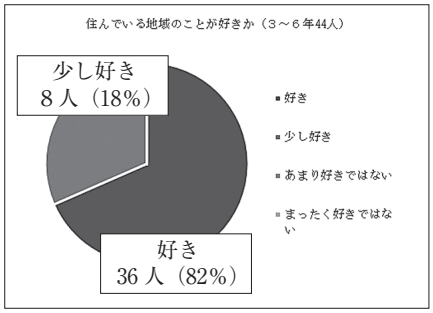


図３　地域に対する意識

地域のことが好きな理由として、きれいな山や川など自然が豊かであることを挙げた児童が多い。具体的な理由は以下の通りである。

・自然がたくさんあるところが好きだから。
・夜に星がきれいに見えるから。花も咲いているから。
・風が気持ちいいから。食べ物がおいしいから。
・安全だし、森林がたくさんある。
・緑も魚もいっぱいいる。空気もきれい。
・吉賀町や柿木の人は、みんな優しいから。
・地域の方が優しいし、思いやりがあるから。
・町の人たちがとても優しくて、親切なところ。

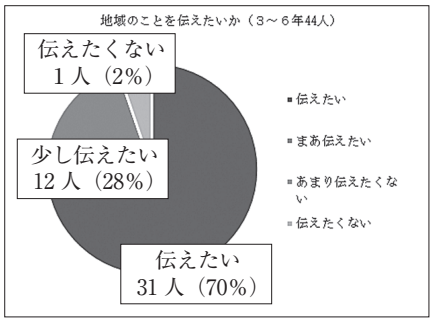


図４　地域のことを発信する意欲

次に「住んでいる地域のことを他の人に伝えたいか」

という質問に対しても、「伝えたい」と「少し伝えたい」を合わせると、答えた児童の割合が98%と非常に高い（図４）。伝えたい内容として、高津川や鮎のこと、柿木の有機野菜、高津川など自然の美しさ、習っている神楽のこと等の自然や特産品、伝統芸能などに加え、地域の人が優しいことを伝えたいという児童も多かった。

地域が好きな理由、そして地域のことを伝えたい理由を詳しく分析していくと、豊かできれいな自然がたくさんあるという「もの・こと」に関する記述に加えて、吉賀町や柿木の地域の人が、とても優しくて親切であるという記述が多く見られた。これは、地域の「人」に対する肯定的な感情を示している。このことが、本校の児童の地域肯定感が高いことと密接に関連していることが分かる。この意識調査を通して、児童が地域に愛着を持ち、その良さを伝えたいという意欲を持っていることが明らかになった。

地域のことを伝えたいという強い意欲を持っている児童が多い一方で、地域の実態を考えると、日常的に外国の人と接したり交流したりする機会は少ないと言える。また、自分の思いや考えを積極的に言葉で伝える力が弱いという本校児童の実態を考えると、初めて出会うゲストに話しかけたり、英語を使って交流したりすることにかなりの緊張感を伴うことが予想される。このような地域や児童の実態を踏まえ、「World Day in Kakinoki」を通じて児童が意欲的に自分の思いや考えを伝えることができるようになることを目指し、イベントのねらいの設定や内容の検討を行った。

Ⅲ　「World Day in Kakinoki」の企画について

１．「World Day in Kakinoki」の概要

「World Day in Kakinoki」は2020年７月29日に実施し、柿木小学校５年生（７人）、６年生（19人）が参加した。授業の一環として行い、１学期に学んできた英語表現を使って、児童が外国人のゲストに地域の良さを伝えるという学期全体の単元のゴールという位置付けとした。当日のスケジュールにもあるように、住んでいる地域（柿木）の良さを、児童がゲストに発信する活動は、研究の柱である地域素材の活用と大きく関わっている（図５）。今回は、アメリカ、イタリア、韓国出身の５人のゲストを招き、それぞれのゲストのことや出身国の文化について聞く活動も行った。

①Opening Ceremony（始めの会）8：50～9：00
・５人のゲストの紹介
②True or False Quiz（○×クイズ）9：00～9：15
・それぞれのゲストに関するクイズ
③World Corner（ゲストの発表）9：20～10：40
・１人のゲストが15分の発表（質疑応答を含む）
・ローテーションをしながら、５人のゲストの話を聞く。
④Let's Talk About Kakinoki（柿木の紹介）
10：50～11：20
・児童が地域（吉賀町・柿木）の良さをゲストに紹介
⑤Let's Play！（ゲストと遊ぼう）11：20～11：40
・児童とゲストが一緒にクイズに答える活動
⑥Closing Ceremony（終わりの会）11：40～12：00

図５　当日のスケジュール

２．吉賀町教育委員会と連携しての企画・運営

企画・運営に関わる内容について詳述する。これは外国語教育において外国の人と交流するニーズが高まっている現在、イベントの準備の過程を記録に残すことで企画・運営の方法が蓄

積され、次回以降のイベントの運営に生かすことができると共に、他校との連携等の広がりに繋がる可能性があると考えたからである。企画段階で大切にしたポイントの一点目は、児童が英語にたっぷりと触れ、初めて出会うゲストとの交流を通して積極的にコミュニケーションを図る態度を身に付けるということである。そのためには、ゲストの話を聞く活動を十分に取ることに加え、児童もゲストに柿木の良さや柿木小学校のことを紹介することで、発信力の高まりに繋がると考えた。二点目は、先述の通り来年度以降も実施できるような持続可能な取り組みにすることである。そのために、作成した資料や記録写真・動画等をデータで保存しておくこととした。本イベントは、吉賀町サクラマスプロジェクトの「子どもと先生夢ゆめ企画」に採択された。町の事業として採択されたことで予算化され、吉賀町教育委員会との連携の深まりにつながり、企画や運営のノウハウが教育委員会に蓄積されることに繋がったことは大きな成果である。

「World Day in Kakinoki」の企画・運営を主に担ったメンバーは、筆者と吉賀町ALTのケビン氏、吉賀町教育委員会の大石氏である。吉賀町ALTのケビン氏は、10年以上吉賀町の外国語教育に関わっており、経験豊富なアイデアを生かした授業づくり、児童・生徒理解に定評がある。また、大石氏も堪能な英語力を生かした授業での指導や、子どもたちへの支援、ALTの日程交渉など、吉賀町の外国語教育に欠かせない存在である。両名はゲストのフォロー役も担った。

３．ゲストへの依頼と調整について

地域や児童の実態を踏まえ、ゲストの選定を行った。今回は、アメリカ出身のゲストが３名（津和野町ALT２名、津和野町国際交流員１名）、イタリア出身１名（津和野町在住）、韓国出身１名（島根大学大学院に在学中）の計５名のゲストに依頼した。

事前に、関係自治体や教育委員会への派遣申請書の提出、ゲスト宛への派遣依頼書の送付を行った。当日の交通手段や旅費等の交渉については、行政担当者と複数回連絡を取り合った。また、ゲストとの交渉にはメールを活用したが、その際、日本語の文書や連絡事項の英訳等、吉賀町ALTがゲストとの交渉に大いに貢献した。

図６　事前に児童に示したゲストの紹介

今回は、アメリカ出身のゲストが３人おり、発表の内容を調整する必要があった。そのためイベントの１週間前に事前打ち合わせ会を行い、ゲストが発表に向けて作成したプレゼンテーション資料を見て、内容の重複、発表時間の長さ、児童にとってより分かりやすくするための工夫等について話し合った。おおよその発表内容や時間の把握ができたことも、運営面のメリットであった。また、事前に児童にゲストのことを紹介し興味関心を高めることにつながったという点でも、事前打ち合わせ会の意義が大きかったと言える（図６）。

Ⅳ　「World Day in Kakinoki」各活動の目的や準備の詳細、及び成果と課題について

本章では、イベントのねらいに続き、各活動の目的や準備の様子、成果と課題について述べる。

１．イベントのねらいと環境の設定

児童が十分に英語に触れ、初めて出会う近隣のALTや留学生５名との交流を通して、異なる文化について体験的に理解すること、また英語のインプットだけでなく、児童自身のことや柿木の良さをゲストに発信していく力を高めることを本イベントのねらいとした。さらに、子どもたちが事前の準備や当日の活動に、ねらいを意識しながら活動できるように合言葉（Let’s enjoy！～自分が楽しもう、ゲストの方に楽しんでもらおう～）を決め、事前の準備段階や本番の活動中などでこの合言葉を児童と共有した。一方で、イベントのねらいに迫るためのアプローチは児童それぞれで異なることが考えられるため、個人のめあてをあらかじめシートに記入するようにした。イベント後にめあての達成度を振り返ることで、児童の意欲の高まりにつながると考えた。

児童や参観者等多くの人数を収容できること、さらにコロナウイルス感染拡大防止のため広い会場が必要であったことから、本イベントを柿木中学校の体育館で行った。児童の中には、他のグループの声が聞こえたり画面が見えたりすると活動に集中しづらい児童もいる。そのため広い会場であるというメリットを生かし、ゲストのブースの間隔を広く取り、お互いの音声や画像が気にならないように配慮した。（図７）

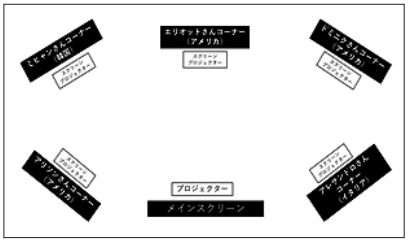


図７　会場レイアウト図

また、５人のゲストそれぞれにプロジェクターとスクリーンを用意し、大画面で説明できるように準備した。

２．ゲストの話を聞く活動（World Corner）

イベントのねらいの一つである「初めて出会う色々な国の方と交流することを通して、日本と異なる文化などについて体験的に理解を深める」という点をもとに、５人のゲストの話を聞き、ゲスト自身のことや出身国のことを理解するための活動を設定した。ゲストの持ち時間は15分とし、10分を発表、５分を質疑応答の時間とした。児童は、５・６年生混合の４グループに分かれて活動を行った。混合のグループにすることで、６年生が良いモデルとなり５年生に教えたり活動をリードしたりすることにつながると考えたからである。

この活動の成果として、児童がまとまった英語を聞くことで、何とか理解しようと一生懸命に聞いている姿が見られたことである（図８）。児童の振り返りにも、「こんなにたくさんの英語を聞くのは初めてだった」との記述があり、授業中ではなかなか体験できない良質で多くのインプットが得られたことが分かった。さらに、３か国の生活や文化について、映像や写真なども交えながら学習することができたことも貴重な経験となった。

図８　ゲストの話を聞く活動

課題としては、一つ目に時間の設定がある。15分の聞く活動

を５回行ったことで、多くの児童にとっては英語を聞くことに関して大きな学びとなったが、支援が必要な児童にとっては集中を継続することが難しかった。改善策として、発表時間を短くしたり回数を減らしたりする方法が考えられる。課題の二つ目として、ゲストへの質問が少なかったことが挙げられる。緊張感も原因として考えられるが、柿木小学校児童の課題の一つである「挑戦する力」「表現力」という点が背景にあることが予想される。これらの力は、イベントだけで身に付けることは難しい。日頃の外国語の授業の中で、相手意識を持ちながら、自分の気持ちや質問を相手に伝えていくという経験を積み重ねていく必要がある。また、外国語だけでなく他教科でも同様に取り組むことで効果が上がることが予想され、教科横断の視点が大切になることを再認識した。

３．柿木の良さを発表する活動（Let's talk about Kakinoki）～地域素材の活用の部分～

地域素材の活用と大きく関わっており、「自分のことや吉賀町（柿木）のよいところなどを、今までに学習した英語表現を使って、ゲストの方に伝える力を身に付ける」というアウトプットに関するねらいを達成するための活動である。この活動で児童は、これまでに学習してきた英語表現や簡単な語句などを用いて、生まれ育った柿木の良さや、柿木小学校について発表することに挑戦した（図９）。

図９　地域の良さを発信する児童

柿木小学校児童の弱みとして、「挑戦する力」や「表現力」が挙げられることは先に述べた。令和２年度５月に柿木小学校３～６年生を対象にした実態調査によると、「英語で自分の考えや気持ちを話すことは好きか」という質問に対して、75％の児童が肯定的な回答を示した一方で、25％の児童は「あまり好きではない」と答えている。これは、学年が上がるにつれて顕著となっており、発音に対する不安や自信のなさ、恥ずかしさ等が背景として考えられる。このような児童の実態を踏まえ、児童が自信を持って、思いや考えを発表するために、地域素材を活用することに取り組んだ。児童にとって身近な素材である地域のことをゲストに発表することで、何のために発表するかという目的意識、誰に伝えるかという相手意識が高まり、伝えようという意欲が高まるのではないかと考えた。

発表は、５・６年生の混合グループで行った。各グループが発表するテーマの選定については、事前の授業の中で十分に時間を取り、児童に考える時間を保障した。教師がテーマを選ぶのではなく、自ら考えたテーマで発表した方がゲストに伝えようという意欲が高まることが予想される。また、ゲストに地域の良さを分かってもらうために、発表の方法を工夫するなどの相手意識につながると考えたからである。

テーマを決定するためのグループの話し合いでは、最初全てのグループが、「高津川」と「有機野菜」をテーマとして選んだ。テーマが重なったのは偶然であるが、ふるさと学習の経験を振り返ると、その理由が推測できる。柿木小学校の児童は、総合的な学習の時間等でふるさと学習に熱心に取り組んでいる。３年生で高津川、４年生で有機野菜、５年生で森林、６年生で棚田での米作りについて学習する。このことを踏まえれば、中学年で学習した高津川や有機野菜のことをテーマとして選んだことは、ふるさと学習の大きな成果と言える。その後、全

体で共有しながらテーマの決定をした。「ゲストに柿木の良さをぜひ知ってもらうために、必要な内容は他にないか」という問いかけに、児童は真剣に考え話し合った。その結果、地元で有名な「大井谷棚田」と、地域に根付く「白谷神楽」がテーマに加わった。

こうして「高津川（鮎）」「柿木のおいしい給食（有機野菜）」「大井谷棚田」「白谷神楽」の４つのテーマが決定し、発表の準備に入った。今回は、①自己紹介（好きなもの、得意なこと）、②柿木の紹介、③柿木小学校の紹介の順で発表することを児童と相談して決めた。①の自己紹介については、１学期に学習した英語表現を使って発表できるように、教科書の内容を振り返ったり、ノートに自分が伝えたいことを書かせたりした。②は各グループのテーマに沿った内容である。③は、ゲストの全員が柿木小学校に来るのが初めてであること、児童自身も自分の学校について知らないことがあるのではないか、という思いの元に取り入れた内容である。

ゲストにどうやったら分かりやすく伝わるか、また楽しんでもらえるかという問いかけに対して、クイズを取り入れたら楽しんでもらえるのではないかと答えた児童が多かった。そこで、今回は発表の中にクイズを取り入れ、一方的な発表ではなくゲストと児童が一緒に参加できるよう工夫した。

図10　鮎を題材としたクイズ

ここで、それぞれのグループの発表内容や、クイズの具体について紹介する。Aグループは、柿木にある大井谷の棚田をテーマに選び発表した。棚田については、主に高学年で総合的な学習の時間などで学習している。毎年６年生になると、大井谷の棚田を訪れ、田植えや草ぬき、稲刈り等を体験している。このように、ふるさと学習と深い結びつきがあることも、地域のことを伝えたいという意欲につながったと考えられる。Bグループは、柿木で生産される有機野菜を取り上げた。地元で生産された有機野菜は、学校給食でもふんだんに使われており、たいへんおいしいことから柿木の給食と併せて発表しようということになった。児童は発表の中に、「柿木の給食クイズ」を取り入れた。中には、給食を食べたことがないというゲストもいたが、児童と日本語と英語を交えながら相談する場面も見られた。Cグループが選んだテーマは、柿木で伝統的に行われている白谷神楽である。石見神楽の迫力のある太鼓のリズムと、鬼や大蛇、キツネ、サルなど、たくさんの人物や動物も登場し、子どもたちにも人気がある。その白谷神楽のことを知ってもらおうと、神楽に出てくる人物や動物を紹介したり、神楽の演奏で使う道具をクイズにしたりするなど、発表の工夫をしていた。Dグループは、日本一の清流に選ばれた高津川と、そこに泳ぐ鮎をテーマとして選んだ。映画「高津川」（2019　錦織良成監督）が上映されたことや、鮎を使った料理をクイズにして発表した（図10）。

このように発表の中にクイズを取り入れたことで、児童とゲストが自然と会話ができるきっかけとなった。柿木に関するクイズは、児童が良く知っている内容であり、ゲストに張り切って伝えようとしていた。また柿木小学校に関するクイズは、意外と児童も知らない内容が多く、ゲストと児童が一緒になって答えを考える姿が自然と生まれ、ゲストと児童の距離が縮まった瞬間だった。

４．ゲストと遊ぶ活動（Let’s Play）

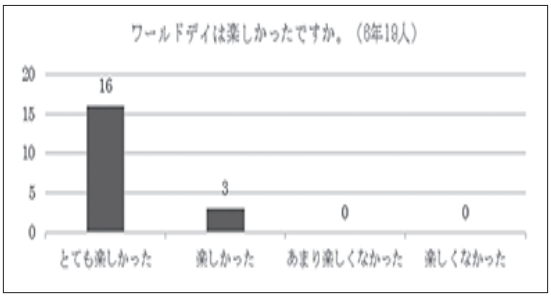
ゲストとさらに親睦を深めることを目的として、４～５人の児童グループの中にゲストが入り、「What’s this？」クイズに取り組んだ。ALTのケビン氏が用意した写真を提示し、何であるかを当てるクイズである。ゲストも児童も同じ立場で考えることになるため、大いに盛り上がった。グループ内での会話を聞いてみると、英語と日本語が混じっており、日本語でゲストに話しかける場面も多く見られた。しかし、柿木小児童の弱みである「発信力」「自分の思いを伝えようとする力」を踏まえると、何とかゲストに伝えよう、話してみようという姿が見られたことは大きな成果であったと考える。

Ⅴ　児童の振り返りの分析

１．イベント後のアンケート調査の分析

「World Day in Kakinoki」を通して、児童がどのようなことを感じたのか、またどのような力が身に付いたのか、さらには今後どのようなことをがんばっていこうと感じたのかという点について、５年生７人、６年生19人の計26人に行ったアンケート（巻末資料２）と、事後に児童が書いた振り返りの記述等に着目し、全体としての傾向、さらには個別の変化や成長について分析と考察を行う。

「ワールドデイは楽しかったですか」という質問に対して、６年生は16名が「とても楽しかった」、３名が「楽しかった」と回答し、また５年生は、７名全員が「とても楽しかった」と答えており（図11）、どちらの学年も100％の児童が肯定的な回答をしている。特に５年生は、積極的に人前で自分の思いや考えを表現するのが苦手な児童が多い。そのため、全員の児童が「とても楽しかった」と答えたのは、今後の外国語学習への動機づけにプラスに影響するのではないかと考える。



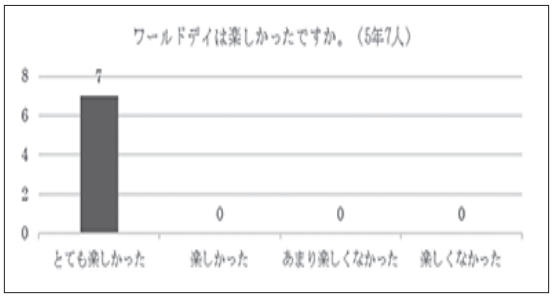


図11　アンケート結果（５年、６年）

また「ワールドデイを通して、どんな力が高まったと思いますか」という質問に対して自由記述を求め、キーワードごとに分類した（図12）。どちらの学年でも数値が高かったのは、「英語を話す力」「英語を聞く力」である。「英語を話す力」については、６年生19人中15人が、５年生は７人全員が高まったと回答した。「英語を聞く力」については、６年生が19人中14人、５年生は７人中６人が高まったと答えた。これは、各ゲストからの話を聞き、英語に触れる時間が十分に保障されていたこと、地域のことを紹介するのに英語を用いて発表することに挑戦

したことが、大きく影響していると考える。次に高いのが、「外国の文化を理解する力」の項目であり、６年生は10人、５年生は４人の児童が高まったと回答した。ゲストの発表が、趣味や得意なことなど本人に関わること、食事や生活習慣など国の文化に関わることなど、児童にとって興味深いものであったことが背景として考えられる。

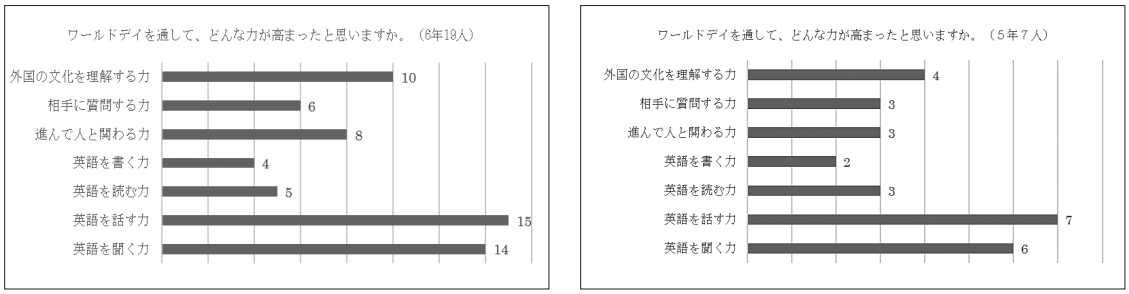


図12　イベントを通してどんな力が高まったか（５年、６年）

一方で、どちらの学年も「進んで人と関わる力」「相手に質問する力」が、他の項目よりも数値が低かった。「進んで人と関わる力」については、６年生19人中８人、５年生は７人中３人で、「相手に質問する力」についても、６年生は19人中６人、５年生は７人中３人となっており、両項目とも５割を下回っている。イベントの前半では、児童にかなり緊張している様子が見られ、ゲストにもなかなか話しかけられなかった。ゲストの話を聞く活動（World Corner）では、ゲストの話の後に質問コーナーを設けていたが、全体的に質問が少なかった。中には、積極的にゲストに話しかけたり、何度も質問をしたりする児童もおり肯定的な回答も見られるが、全体としては、「相手に質問する力」や「進んで人と関わる力」が高まっていると感じている児童は少なかった。児童にとって「挑戦する力」や「表現力」が、今後の課題であることを再認識した。

次に、ワールドデイを経験した児童が、今後の外国語学習において、どのような課題を持ち、どのようなことをがんばろうとしているのかについても自由記述を求め、キーワードごとに分類し分析を行った。

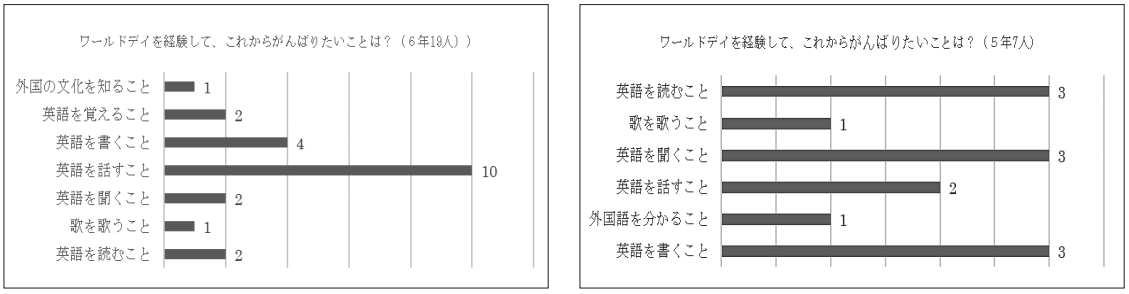


図13　これからがんばりたいこと（５年、６年）

6年生では、「英語を話すこと」をがんばりたいという児童が10人（52%）と最も多い（図13）。次いで「英語を書くこと」が4人（21%）、「英語を覚えること」「英語を読むこと」「英語を聞くこと」が2人（10%）と続いている。5年生では、「英語を読むこと」「英語を聞くこと」「英語を書くこと」がいずれも3人（42%）と最も多かった。

6年生で「英語を話すこと」を挙げた児童の割合が高かったのは、初めて出会うゲストと交流し、地域の良さを発表したり、クイズの答えを相談したりする中で、英語で話すことへの意欲が高まったためと考えられる。また、ゲストとの会話は英語だけは難しく、日本語を多く用いてのコミュニケーションとなった。このことも、次回はもっと英語を話せるようになってゲストと話したいという動機付けに繋がった。

「英語を聞く力を高めたい」という児童が、両学年に多かった（全体の20%）。ゲストの話を聞く活動（World Corner）では、1人15分の聞く活動を5人分体験したことになり、児童はたっぷりと英語を聞くことができた。中には、あまり聞き取れなかったと感じた児童もいたはずである。そのような児童にとっては、もっと英語が聞けるようになりたいと思ったことが予想される。英語のリスニングを繰り返すのではなく、初めて出会ったゲストのことをもっと知りたい、分かりたいという気持ちが高まっていた。英語を聞く場面でも、相手意識が大切であるということを再認識した。

5年生において「英語を読むこと」「英語を聞くこと」「英語を書くこと」をがんばりたいという児童が多い（それぞれ全体の42%）のも特徴的である（図13）。5年生は、英語を聞いたり読んだりする活動は好むが、話したり発表したりする活動は苦手な実態がある。本イベントでは、英語を聞いたり話したりする活動が主であり、英語を読んだり書いたりする場面は少なかった。今回、ゲストの話を十分に聞く活動があり（インプットの活動）、さらには地域の良さをゲストに紹介する活動（アウトプットの活動）を経験したことで、「聞くこと」への意欲が高まり、さらには「読むことや書くこと」にもチャレンジしたいという気持ちが芽生えた。令和2年度より、小学校高学年に教科となる外国語科が導入され、「読むこと」や「書くこと」も段階的に増えてくる。本イベントを通して高まった英語で話すことや聞くことへの意欲を生かし、目的や場面の設定をした上で、英語を読んだり書いたりする活動を取り入れることで、外国語学習への意欲の高まりも期待できる。

2．地域に対する意識の変容

住んでいる地域（吉賀町、柿木）に対する児童の意識の変容について、令和2年5月に行った地域への意識を知るためのアンケート調査と、イベント後（7月末）に実施した同様の調査（巻末資料2）の結果を比較しながら考察する。6年生は5月の時点で、「地域のことが好き」と答えた児童が13人（68%）、「少し好き」と答えた児童は6人（31%）であったが、イベント後の調査では、「好き」が15人（78%）、「少し好き」が4人（21%）となっており、地域のことが好きだと回答した児童が増加した（図14）。5年生は、5月とイベント後の調査の両方で、全員の児童が「地域のことが好き」と回答した。

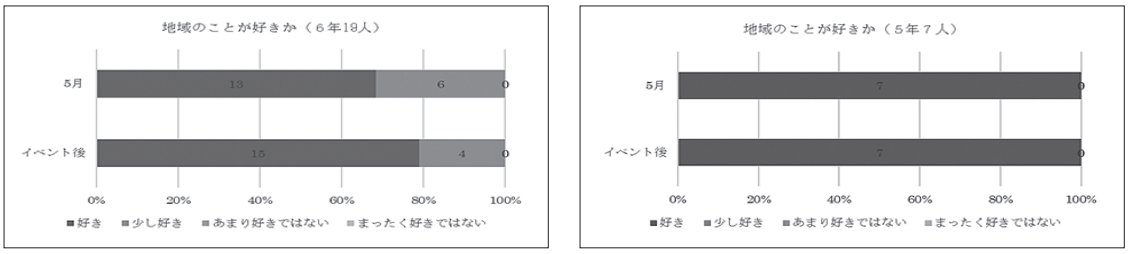


図14　地域に対する意識の変容（５年、６年）

イベント後の調査で、地域のことが好きな理由の記述を求めたところ、きれいな山や川があること、鮎が泳いでいること、地域の人が優しく親切であることなどが挙がった。地域が大好きであるという児童の実態を生かし、授業の中に地域素材を活用したことで、伝えたいという意欲が高まるとともに、地域の良さを再認識したことが調査結果の分析から分かった。児童にとって地域の素材は生活の一部であり身近な存在である。そのような慣れ親しんだ身近な素材を活用することは、相手に思いや考えを伝える際の自信にもつながる。

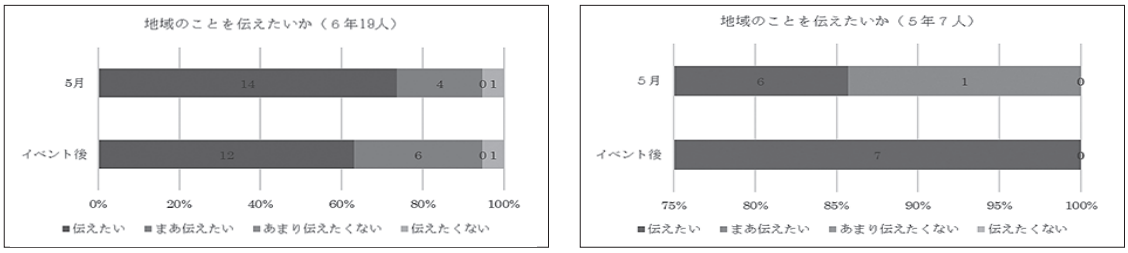


図15　地域のことを発信する意欲の変容（５年、６年）

さらに、「住んでいる地域（柿木・吉賀町）のことを他の人に伝えたいと思いますか」という質問に対しても、５月とイベント後（７月末）の調査結果を比較した。６年生は、５月に「伝えたい」と答えた２名の児童が、イベント後には「まあ伝えたい」と回答しており、数値が少し下がった（図15）。５年生は、５月に「まあ伝えたい」と答えた１名の児童が「伝えたい」に回答が変わっており数値が向上した。肯定的な回答が多い背景として、以下のことが考えられる。地域の良さを発表する場面において、児童が自ら発表したいテーマを選んだことで、自主的に何度も練習し、ゲストに分かりやすく伝わるように発表の仕方を工夫する姿が見られた。地域素材を活用することで、児童がより主体的に学習し、相手に伝えたいという意欲の高まりにつながった。

３．児童の振り返りの分析から分かったこと

アンケート調査の分析から５年生の意欲の高まりが顕著に見られることから、５年生児童が設定した個人のめあてとその振り返りについて、児童の記述に着目しキーワードごとに分類し分析を行った。

表１　５年生の振り返りの記述

児童	活動のめあて	めあての振り返り
A	ゲストの方に柿木のことを知ってもらえるように発表する。	ゲストの方に、柿木のことを知ってもらえた。発表している時には、ゲストの皆さん全員が楽しそうにやってくださっていたので、うれしかった。
B	必ず３つ以上質問する。ゲストの皆さんの話をよく聞く。	３つ以上質問することができてよかった。ゲストの皆さんの話をよく聞くことができたし、大きな声でゆっくり言えた。
C	自分が言う言葉をはっきり言う。	自分のめあてができているなと思った。きんちょうはしたけど、はっきり言えたのでよかった。クイズの時も自分の考えが言えた。今度からも、はっきり言いたいと思った。
D	ゲストの人に聞こえる声で言う。	ゲストの方に伝わってよかったと思う。初めて外国の人とたくさん話したけど、しっかり伝わってよかった。
E	ゲストの話をきちんと聞く。クイズを大きな声で言う。	話を聞く時は、相手の顔をきちんと見て聞くことができた。友達と助け合い作ったクイズを言うのは、とても気持ちが晴れた。大きな声で言えたので、後ろの方にも聞こえたかなと思う。
F	ゲストの方に伝わるように、大きな声ではっきり言う。このクイズで柿木について分かってもらう。	練習の時よりも、クイズをゆっくりはっきり言えたのでうれしかった。クイズが終わった後、ゲストの方が柿木についてよく分かったと言ってくださったので、うれしかった。
G	ゆっくりはっきり外国語を言う。聞こえやすい声で。	ゆっくり、はっきり、聞こえやすい声で、外国語を言えたのでよかった。

めあてに着目すると、「発表する」や「言う」というように英語を話すことについてのめあてを設定している児童が６人、「ゲストの話をきちんと聞く」というように英語を聞くことに関するめあてが２名、「必ず３つ以上質問する」とあるように、質問することに関するめあてが１名というように分類できる（表１）。また、「ゲストに」という記述が７人中５人に見られ、相手意識を持って活動しようとしていることが読み取れる。振り返りでも、「ゲストの方に柿木のことを知ってもらえた。」というように、相手に伝わった喜びを感じていることが分かる。また、「ゲストの皆さん全員が楽しそうにやってくださっていたので、うれしかった。」との記述もあり、合言葉を頭の中に置きながら相手意識を持って活動していたことがめあての振り返りから読み取れた。

さらに、イベント後に５年生児童が書いた感想の分析を行った。紙幅の都合上、全ての感想を掲載することが出来ないため、コメントの一部を取り上げる。「すごく楽しい時間で、私は心がウキウキしました。本当に楽しい時間でした。」とあるように、今後の学習や活動に対する期待感や意欲が高まっているという点が見て取れる。「今日で私は、もともと好きだった英語が、もっともっと好きになることができました。」という記述からも、今後の外国語学習への意欲が高まりが見られた。また、「ゲストの方の好きな食べ物やきらいな食べ物、ごはんの食べ方、好きな色、いろんなことがたくさん聞けたのでよかったです。韓国のごはんの食べ方を聞いて、器を持って食べないということがびっくりしました。」との記述にあるように、異なる文化について興味を持ったことが分かる。帰宅後にイベントのことを家族に話したという記述もあり、学んだことをすぐに発信していたことも分かった。同時に、英語を使って発表す

ることに対して、かなり緊張感を持っていたことが記述から読み取れる。「ゲストの方と会った時、だいじょうぶかなと思いました。クイズの発表もあまり自信がありませんでした。」とあり、自信のなさが窺える。しかし、「ゲストの方のお話を聞く時、あまり質問ができませんでした。けれども、３人目のゲストの方で、ようやく質問ができました。」との記述から、緊張しながらも勇気をふり絞って何とかゲストと話をしてみたことが分かった。今回だけで自信を持って自分の思いや考えを発信する力を身に付けることは難しく、日常の授業からの積み重ねが不可欠である。今回の貴重な経験を契機とし、次の学習への意欲につなげたい。

４．参観者からの反応

イベント当日は、近隣の小学校や中学校の外国語担当教員、高校の英語科教員など、多数の方が参観した。参観者からのコメントを、キーワードごとに分類しながら分析すると、「World Day in Kakinoki」が、外国語学習への意欲につながったこと、異文化理解の機会となったこと、地域素材を活用することの意義と効果、地域の実態を生かしたイベントであったこと、の大きく４点に分類することができた。

本イベントに、小学校をはじめ中学校や高等学校の教員が参観したことは、大きな意味がある。外国語担当者や英語科教員と面識ができたことで、今後、授業を通した連携が進む可能性が広がる。また、このイベントが継続した取り組みとなるよう、吉賀町教育委員会や町内各校と連携を取りながら進めていきたいと考えている。

Ⅶ　「World Day in Kakinoki」全体を通しての成果と課題について

１．成果について

「World Day in Kakinoki」の取り組み全体を通しての成果について以下に述べる。

①　授業ではなかなか味わえない英語の良質なインプットを、大量に受け取ることができたこと。

５人のゲストに来てもらったことが、大きな成果を生んだと言える。事前に打ち合わせを行い、ゲストが話す内容が重複しないように調整を行い、興味・関心が高まるように工夫をしたことで、児童が聞く活動に意欲的に取り組むことにつながった。

②　地域素材を活用し、英語を使って地域のことを発信できたこと。（アウトプット）

児童にとっても指導者にとってもチャレンジの内容であった。英語を聞く活動だけでも、かなりの学習効果を期待することができるが、表現する力や挑戦する力が弱いという柿木小学校児童の実態を踏まえて、今回はあえて発信する活動を取り入れた。先述のアンケートや振り返りからの分析にもあるように、児童は地域の良さがゲストに伝わった喜びを感じ取っている。地域素材を活用し、発表につなげたことで、児童が自信を持って発信することができたと考える。

③　様々な国のゲストから話を聞くことで、異なる文化について体験的に学ぶことができたこと。

児童の振り返りにも多くの記述が見られ、児童にとってアメリカ、イタリア、韓国の人から話を聞いたり、文化について学んだりする経験はたいへん貴重であり、それぞれの国の様子や

文化について体験的に学ぶことができた。②と③の内容に関わって、イベントの企画・運営に中心的に関わった吉賀町ALTのケビン氏がコメントをしており、その一部を以下に示す。

Students here don't have many chances to see and talk with people from other countries, so it was a great chance for them to communicate with five guests from three different countries. At first, students were quite shy, but, little by little, they became more comfortable and began talking more with the guests. They tried to communicate using a mix of English, Japanese, and gestures. I think it was a great experience for them to enjoy communicating with the guests.

Overall, I think this event was great experience for all the participants. The students' comments about the event were overwhelmingly positive, and many of them said they wanted to meet the guests again and talk more with them. I think this experience will motivate some students to study English harder, and I think they will be more interested in talking with foreigners in the future. Learning about foreign cultures and talking with people from different countries are extremely important, so I hope that World Day in Kakinoki can continue in the future.

【訳】本校の児童は、他国の人と会ったり話したりする機会が多くないので、３か国からの５人のゲストと交流する大きなチャンスだった。最初児童は恥ずかしがっていたが、少しずつ打ち解け、ゲストとの会話が増えていった。英語や日本語、ジェスチャーを使いながら、何とか伝えようとしていた。ゲストとの交流を楽しむことは、児童にとってたいへん大きな経験となった。このイベントについての児童の振り返りの多くが肯定的であり、またゲストに会って、もっと話がしたいと答えた。この経験は、もっと英語を学びたいという児童の意欲につながるであろうし、将来、外国の人ともっと話してみたいと思うであろう。外国の異なる文化について学ぶこと、異なる国の人と話をすることはたいへん重要であり、ワールドデイ・イン柿木の取り組みが、これからも継続されていくことを期待している。

④　地域の良さを発信することを通して、ふるさとのすばらしさを再発見できたこと。

児童はこれまで、地域の人・もの・ことについて、ふるさと学習など様々な学習や活動を通して学んできている。幼少から慣れ親しんだ地域の素材を活用することは、発信する際の自信になるとともに、ふるさとのすばらしさを再発見することにつながった。例えば、柿木の有機野菜について発表したグループは、有機野菜が給食のどのメニューに使われているかを調べ、使われている野菜の種類の多さに驚いていた。また、高津川について発表したグループは、鮎を使ったメニューにはどのようなものがあるか調査し、鮎飯などのおいしい料理があることを発見していた。このように、地域で知らなかったことが多くあり、児童や指導者が新たに学んだふるさとの良さがたくさんあった。

⑤　小・中・高の教員、教育委員会、指導主事等との新たなつながりが生まれ、小中高の授業を通した連携が進み始めたこと。

これは運営側の成果である。小学校だけでなく中学校や高等学校の教員にもイベントを参観してもらったことで、小学校での外国語授業の様子を知ってもらう機会となった。中学校教員からは、「どんな子どもたちがいるのか、どんな様子で外国語の授業に参加しているのかが分かって良かった」との感想があった。外国語教育の接続という点で考えると、小学校の外国語

の授業を中学校や高校の教員に見てもらうことは大きな意義がある。このイベントを通して繋がりができた教員と連携し、小中高の授業を通した連携も始まった。吉賀町は、小学校が５校、中学校が３校、高等学校が１校あり、いずれも小規模校であり、連携が取りやすい環境とも言える。小学校との連携については、町内小学校とオンラインでの言語活動を実施した。また、吉賀高校２年生と柿木小学校６年生との交流、柿木中学校２年生と６年生の交流というように中学校、高校との授業を通した連携に繋がったことも大きな成果と言える。

２．課題について

本イベント全体を通しての課題を以下に述べる。

①　初めて出会う人に積極的に関わろうとする力、質問をする力をどう高めていくか。

子どもたちについては、先述の通り、ゲストの話を聞いた後に質問が出ないという状況が多く見られた。初めて出会うゲストに対して、かなり緊張していたことが予想できる。話を聞いたことに対して相手に質問する力、さらにはどのように質問すればよいのかというスキルの面も高めていく必要があるのではないかと考える。既習事項を使いながら質問する時に、「Do you like～？」等の表現は様々な場面で活用が可能である。日常の外国語の授業から、教師が児童とのやり取りの中で積極的に使ったり、Small Talkなど児童同士の会話のやり取りの場面で使ってみるよう助言したりすることもできる。質問する力については、外国語の授業だけで高めていくのではなく、様々な教科でも取り入れ、教科横断的に取り組んでいく方が効果的であろう。

②　年間指導計画への位置づけについて

本イベントは、１学期に学習してきた英語表現を使って、外部のゲストに発表する場面という位置付けであった。初めての試みだったため、準備や練習を始めるのが直前になってしまった。このイベントが年間指導計画にきちんと位置付けられていれば、計画的に準備を進めることができる。2020年度中に、地域素材の活用とワールドデイを含めた年間指導計画を作成し、来年度につなげていきたい。

③　イベントを継続的な取り組みにしていくための具体策について

今回はサクラマスプロジェクトの「子どもと先生夢ゆめ企画」に採択され予算化もされたため、イベントで使う物品の購入や、ゲストの交通費などについて支出することができた。2021年度以降、今年度と同様に多くのゲストを招いたり物品を購入したりすることが難しい可能性もある。しかし、ゲストの話を聞く活動、地域の良さを紹介する活動、ゲストと児童がクイズを共に考える活動などは、今後も実施が可能である。５・６年児童児童がイベント後に書いた感想の記述を見ても、「来年もやってほしい」「ゲストにまた会いたい」という声が非常に多かった。そのような意欲の高まりを今後の授業や活動に生かしていくために、児童が主体的に活動できる手立て、地域素材の活用、ゲストと児童がたくさんコミュニケーションを取るための工夫などを継続して行っていく必要がある。

３．今後の展望について

2020度より５・６年生において「外国語科」が導入され、新しい教科書を用いながらの指導

がスタートした。言語活動を中心に据え、目的意識や相手意識を明確にしながら授業を行っていくことは今後も重要となる。本イベントを通して、柿木や吉賀町からも英語を使って世界に発信することができるということを、児童が実感できたことは大きな成果である。英語を使って生き生きと自分の思いや考えを伝える児童の姿を目指して、引き続き地域素材の活用を軸に置きながら、言語活動の充実に努めていきたい。

参考文献

大谷みどり（2020）『特別支援教育の視点でどの子も学びやすい小学校英語の授業づくり』明治図書

国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』東洋館出版社

島根県教育委員会（2015）『島根の英語教育』

小学校英語教育学会20周年記念誌編集委員会（2020）『小学校英語教育ハンドブック―理論と実践―』東京書籍

丹藤永也（2019）「地域教材開発・活用のすすめ」『英語教育増刊号』大修館書店　pp.6-7

直山木綿子（2019）『なぜ、いま小学校で外国語を学ぶのか』小学館

贄田悠（2019）「英語で発信　埼玉県の魅力」『英語教育増刊号』大修館書店　pp.16-17

錦織良成（2019）『高津川』映画「高津川」製作委員会

MacIntyre, Clement, Dornyei, & Noels（1998）“Conceptualizing willingness to communicate in a L2:A situational model of L2 confidence and affiliation” *Modern Language Journal,* 82 pp.545-562

文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語・外国語活動編』開隆堂

文部科学省（2017b）『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』

文部科学省（2017c）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編』開隆堂

文部科学省（2017d）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語・外国語活動編』開隆堂

八島智子（2019）『外国語学習とコミュニケーションの心理』関西大学出版部

吉賀町ホームページ「吉賀町サクラマスプロジェクト」

＜参考にした教科書等＞

東京書籍株式会社（2020）『NEW HORIZON Elementary English Course 5』

東京書籍株式会社（2020）『NEW HORIZON Elementary English Course 6』

東京書籍株式会社（2020）「Picture Dictionary」

巻末資料１　地域素材のリスト

	吉賀町・柿木	津和野町	益田市
農産物 水産物	棚田米、鮎、有機野菜、ブルーベリー、しいたけ、かき、とうふ	日本酒、里芋、源氏巻栗、和紙、日本茶、わさび	アムスメロン、西条柿、ぶどう、トマト、ゆず、わさび、鮎、はまぐり
伝統芸能	八久呂太鼓、神楽（白谷神楽） 萬歳楽	鷺舞い、津和野踊り 石見神楽	石見神楽、糸操り人形
自　然 景　観	大井谷棚田、高津川 水源公園・一本杉、平栃の滝 安蔵寺山、コウヤマキの自生林 カタクリの里、長瀬峡、深谷大橋 しだれ桜、しゃくなげ、亀田の水穴 ゴギの郷	青野山、高津川 青野山、SL 堀庭園	高津川、雪舟庭園 匹見峡、唐音水仙公園
人　物 歴　史	澄川喜一 森　英恵	森鷗外、西周 安野光雅	柿本人麻呂、雪舟 秦佐八郎
建造物 施設等	道の駅かきのきむら、柿木温泉はとの湯 六日市温泉ゆらら、抜月石積古墳 高尻川ログハウス村、奇鹿神社 唐人焼窯跡、李郎子の墓 右ヶ谷キャンプ場、木部谷温泉（間歇泉） 森英恵フラワーガーデン 澄川喜一記念公園彫刻の道	太鼓谷稲成神社 弥栄神社、永明寺 森鷗外旧宅 西周旧宅 カトリック教会 藩校養老館 安野光雅美術館	グラントワ 医光寺 萬福寺 秦記念館 美濃路屋敷
祭　り イベント	萬歳楽、水源祭り、カタクリ祭り よしか夢花マラソン、シャクナゲ祭り ふるさと夏祭り きん祭みん祭農業文化祭	鷺舞い神事、津和野踊り SL健康マラソン 流鏑馬神事 乙女峠まつり 殿町盆踊り 春季・秋季大祭	水郷祭 石見空港マラソン 益田まつり 万葉まつり 八朔祭

巻末資料２　「World Day in Kakinoki」実施後に行った意識調査

ワールドデイに関するアンケート（５・６年生）

（　　）年　（　　）番　　名前（　　）

このアンケートは、１学期にあった「ワールドデイ・イン柿木」について、みなさんの気持ちを聞くためのものです。テストではありませんので、自分の思ったとおりに答えてください。

●ワールドデイは楽しかったですか。

とても楽しかった　1　　楽しかった　2　　あまり楽しくなかった　3　　楽しくなかった　4

●ワールドデイを通して、どんな力が高まったと思いますか。あてはまるものに何個でも○をつけてください。

英語を聞く力　　英語を話す力　　英語を読む力　　英語を書く力

進んで人と関わる力　　相手に質問する力　　外国の文化を理解する力

そのほか（　　）

●ワールドデイをしてみて、外国語でこれからがんばりたいことは、どんなことですか。

ワールドデイでは、ゲストのみなさんに柿木の良さについて発表しました。

●あなたが住んでいる地域（吉賀町、柿木）のことが好きですか。

好き	少し好き	あまり好きではない	まったく好きではない
1	2	3	4

●あなたは、住んでいる地いき（吉賀町、柿木）のよいところを、もっとほかの人に伝えたいと思いますか。

伝えたい	まあ伝えたい	あまり伝えたくない	伝えたくない
1	2	3	4

ご協力、ありがとうございました。